

本興寺だより

令和四年
二月
第三〇号

「仏眼をかつて時機を考えよ 仏日を用いて国を照らし」

(宗祖 撰時抄)

コロナウイルスの感染が収まるどころか急拡大して、社会に大きな影響が続いています。

「禍を転じて福と為す」という言葉があります。二千年以上前の中国の書物の言葉ですが、「蘇秦」という行動力と知恵のある人が「身に降りかかってきた災難を、見方や考え方、立場を変えてみることによって、幸福への足がかりにするのが聖人（立派な人）の行動の仕方である」と話したことからの言葉ができたと言われています。

今までこれが当たり前と思つて信じて疑わなかった社会の安全、自由な行動等が実は当然のことではなく文字通り有難いことだったのだとコロナにより気付かされます。人は多くの人の助け合いで生きていくことに感謝と思いやりの気持ちを忘れずにいたいものです。まず身近な手洗い、うがい等の行いから励行して、禍を福へと転じる足がかりが物事に対する自分の心の捉え方から見直しから始まると云われます。

二月四日は立春です。旧暦では立春は新年、春の始

鬼は恐ろしいものの代名詞として使われていますが、悪を退治する敵役ではないのです。

鬼とは魂が体を離れて漂う姿とも言われ、人が亡くなることを鬼籍に入ると言います。

人は亡くなつても、この世で鬼の心を通せばあの世でもその心のまま魂がさまようことになるといわれます。人生には何度も、角は生えなくても鬼の心が頭をもたげてくることはあります。その心が芽を出さないように節分の豆は生ではなく入り豆を用います。

秋田県の伝統的な民族行事に「なまはげ」があります。大晦日の夜恐ろしい鬼の面をかぶり「泣く子はいないか・」と家々を回りますが、この鬼の正体は、悪疫を除去し五穀豊穡を祈る神の使者「神鬼」の化身です。

「鬼子母神」という法華經の守護神がおられ

ますが、この神は仏の教えを護り信じて行う人々を厄災から護つて下さる祈祷と子育ての神様です。悪魔には自ら、より強い魔の姿をもって対峙し降伏させて護ってくれる力を持った神です。

鬼にもなれば仏にもなるのが人間です。嫌な事、辛い時でも仏の心を忘れず、自分を見つめる時には鬼のごとく厳しさをもって正していくことが大事だと云われます。

日蓮聖人は、身延山での信行の中で冒頭の文のように生きる指針を示されています。

めでした。前日の節分は一年の最後であり、前年の厄を断ち切るため、年越し蕎麦（そばは麵類の中でも切れやすい）やこんにやく（食物繊維を豊富に含むので体内の掃除をしてくれる）を食べて、清浄な気持ちと身体で新年を迎えたものです。

節分の豆まきも、心の中に頭をもたげる鬼（邪気の気持ち）が霊界の鬼をも引き寄せるので、それを滅する意味があります。

昔話にはいろいろな鬼が出てきます。桃太郎に退治される鬼ヶ島の鬼。一寸法師を飲み込んで腹の中で退治される鬼。旅人を騙して宿泊させ、殺して食べってしまう山姥（やまんば）など。これらの鬼は人に危害を加える恐ろしい鬼ですが、その心が自分の心の中にも少なからず存在することを知らしめているのです。



またいろいろな色の鬼がいます。赤鬼は、燃え盛る火の如く、飽くことを知らない食欲で充滿した心を、青鬼は、どこまでも浸透していく水の如く、怒りや憎しみで何時でも濡れている心を、黒鬼は、腹黒いという言葉があるように、恨みや妬みや不平不満の愚痴で光が差し込まない暗い心を現しています。

黄鬼は、心の動揺や後悔に苛まれ、公平な判断が出れない心を、緑鬼は、やる気がなく沈んでダラダラしてしまう不摂生の心を現わします。鬼の心は自分自身に刃を向けて己を滅ぼすのです。

仏眼（ぶつげん）とは仏様の智慧であり、仏日（ぶつにち）とは仏様の徳のことです。

日蓮聖人は、自分が安らかであることを願うならば、まず何をおいても世の中が穏やかになることを祈らなければならぬと示されました。

仏様の智慧を借りて、日々接する人々、その時々々の状況を正しく考え行動することが大事であり、仏様の徳を用いて自身と世の中を照らし、闇を除き、自分の本當の姿と物事の本質を見極めて対処していかねればならないと云われています。



私たちは今大変便利で快適な生活を手に入っていますが、幸せと感じている人は驚くほど少ないと云われます。それは科学の発達で豊かな生活を得られても、必ずしも幸せに導けないことを示しています。

仏眼（仏の智慧）と仏日（仏の徳）を生かした生き方が、心の幸せを感じ取れる生き方となり、その時に本當の幸せは得られるのだということです。人生で禍（苦悩）と感じる時でも、助け合って生きている福があることを忘れずに感謝し、自己中心に偏らないことです。豆は鬼にも福にも撒くのです。他人から心の中で、節分の豆を浴びせられる鬼にならないように、他の人に福を差し上げられる人にならないように自分を律して生きなさいと云われています。

本興寺住職 中谷 聰 秀